

大学生による遠隔授業の評価と課題

—図書館情報学教育科目におけるアンケート調査結果の分析—

小 山 憲 司

目 次

1. はじめに
2. 遠隔授業の試み
3. 調査方法
4. 調査結果
5. ま と め
6. おわりに

1. はじめに

新型コロナウイルス感染拡大により、国内の大学は2020年度の授業開始時期を延期したり、遠隔授業に切り替えたりなどの対応を余儀なくされた。文部科学省の調査によれば、2020年6月1日時点で「授業を実施している」と回答した大学1,009校（含専門職大学、短期大学）のうち、遠隔授業を実施しているのが600校（59.5%）、面接授業と遠隔授業を併用しているのが308校（30.5%）、面接授業実施校が101校（10.0%）で、9割の大学で遠隔授業が実施された¹⁾。執筆者の勤務する中央大学（以下、本学）でも4月9日開始予定であった前期の授業が2週間後の4月23日開始となった。また、すべての授業が遠隔授業となった。

遠隔授業の実施にあたり、教員が教育内容を修正、変更したり、自らの技能の向上を図ったりなど対応に追われたことは想像に難くない。執筆者もまた、オンライン会議システムの利用方法の習得や授業計画の組み換え、教材の準備など、学内の教職員に協力を仰ぎながら授業を進めた。

上述した状況は不測のこととは言え、今後の大学教育を検討するための大きな経験にもなる。そこで、今回採用した授業方法や対応は適切なものであったかを検証するため、執筆者が担当する講義科目「図書館情報学概論」「図書館情報資源概論」「情報サービス論」において、学生にアンケート調査を実施した。本稿では「図書館情報学概論」の結果を中心に、学生の受講のようす、授業に対する志向、授業の問題点を検討する。

2. 遠隔授業の試み

2.1 研究対象とした図書館情報学教育科目の概要

本稿で研究対象とするのは、執筆者が2020年度前期に担当した「図書館情報学概論」「図書館情報資源概論」「情報サービス論」で、いずれも講義科目である。1回あたり100分、14回の授業を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、4月23日から5月6日までの2週間は特別休講期間となり、初回および第2回は休講となった。そのため、前期科目はいずれも12回を基本とし、休講となった2回分は補講あるいは課題などによって休講に代わる措置を講ずることとなった。

3科目はいずれも、文学部人文社会科学科社会情報学専攻図書館情報学コースの専門科目である。同時に、本学部の司書課程で開設される資格科目の一部でもある。3科目の位置づけを図示したものが表1である。

いずれの科目も司書資格の取得要件を満たすための必修科目である。本学では司書課程を履修で

表1 3科目の履修者の所属と履修年次

科目名	社会情報学専攻	司書課程 (他専攻, 他学部)
図書館情報学概論	1年次必修	2年次以上
図書館情報資源概論	2年次以上選択必修	2年次以上
情報サービス論	2年次以上選択必修	2年次以上

きるのは2年次以上である。他方、「図書館情報学概論」は図書館情報学コース1年生の必修科目である。そのため、当該科目のみ、1年生から4年生まで幅広い学年が履修する点に特徴がある。

2.2 授業の実施方法

(1) 本学の授業実施の方針

本学が4月1日に発信した文書「2020年度学年歴の一部変更について（お知らせ）」で、学生に対して、特別休講期間後の授業は「集合型授業（海外渡航・社会調査等の学外の活動を含む）を行わず、これに代えて、多様なメディアを活用したオンライン授業（双方向型、動画配信型、資料配信型、自習中心型等）により、授業を行う」ことが通知された²⁾。ここでいう多様なメディアを活用したオンライン授業とは、a. 双方向型授業、b. 動画配信型授業、c. 資料配信型授業、d. 自習中心型授業の四つを指す。

aの双方向型授業とは、いわゆるオンライン会議システムを用いてリアルタイムで授業を行うものである。本学ではシスコ社のWebexミーティングが用意された。bの動画配信型授業は、教室などで行った授業を録画し、オンデマンドで配信するものを想定している。三つ目の資料配信型授業は、PowerPointなどを用いて作成された講義資料にナレーションを付けて配信するオンデマンド授業のことである。最後に、dの自習中心型授業は教科書などを用いた学習である。なお、bからdの三つの授業では、授業用教材を学生に提供することに加え、学生からの質問に回答したり、授業で扱うトピックを双方向的に扱ったりすることが求められた。具体的にはメールやmanabaという

学習管理システム（Learning Management System, 以下LMS）の掲示板機能を使って、学生と教員とのやりとりが推奨された。

(2) 授業の実施方法

これを受けて執筆者は、次の三つの方法を用いて、授業を準備した。

- ① LMSを通じてスライドや参考資料をPDFで配布し、オンライン会議システムを用いてリアルタイムで授業を行う同時双方向型（リアルタイム型）
- ② LMSを通じてスライドや参考資料をPDFで、解説資料を音声ファイルで配布するオンデマンド型（オンデマンド型（音声形式））
- ③ LMSを通じてスライドや解説資料、参考資料をすべてPDFで配布するオンデマンド型（オンデマンド型（テキスト形式））

①は、本学の授業実施方針ではaに該当する。加えて、この授業では授業終了後に、授業時に話した内容を記録した音声ファイルをLMSを通じて配布することとした。②は、cの資料配信型授業に相当する。③もcを意図して準備したものであるが、その内容を音声ファイルではなく、テキスト資料（PDF）によって配布した点が異なる。

授業準備にあたって懸念したことの一つは、学生のICT環境である。本専攻では授業開始前に学生に対してICT環境を調査した。その結果、多くの学生が遠隔授業に参加できる環境をもつ一方で、スマートフォンしかない、パソコンを家族と共有しているため使いたいときに使えない可能性がある、パソコンはあるがマイクやカメラがないといったPC環境に課題を抱える学生がいた。また、インターネットの環境がない、もしくはその速度が遅くない、インターネットへの接続はスマートフォンの料金プランに依存するといったネットワーク環境に問題のある学生もいた。さらに、キーボードを用いたPCの利用経験がほとんどないといったPCリテラシーに不安をもつ学生がいるなど、学生によって、いくつもの課題が複合的に重なり合っている状況が確認された。

表2 3科目の授業実施方法と回数

科目名	①リアルタイム型	②オンデマンド型（音声形式）	③オンデマンド型（テキスト形式）
図書館情報学概論	3回（8-10回）	2回（4, 5回）	6回（2, 3, 6, 7, 11, 12回）
図書館情報資源概論	3回（10-12回）	2回（4, 5回）	6回（2, 3, 6-9回）
情報サービス論	3回（8, 11, 12回）	2回（4, 5回）	6回（2, 3, 6, 7, 9, 10回）

そのため、学生に提供する教材も含め、できるかぎり情報量を軽減し、学生の負荷軽減を図ることを目指した³⁾。たとえば②のオンデマンド型（音声形式）は、PowerPointでプレゼンテーション資料を作成し、音声によるナレーションを付け、動画にして配信することも考えられた。しかし、ファイルサイズが大きくなることから、プレゼンテーション資料はPDFで、音声資料はMP3形式の音声ファイルでそれぞれ作成し、配信することにした。また③のオンデマンド型（テキスト形式）では、②で音声ファイルとして配布した解説資料を文字ベースのPDFで提供する方法をとった。

各科目における授業の実施方法、回数は、表2のとおりである。なお、初回はいずれもリアルタイムで実施したが、実質的な授業に入ったのは2回目以降であったため、実施回数の合計は11回となっている。

授業の開始当初の第2回および第3回は、執筆者自身も手探りで授業の準備および運営にあっていたこともあり、③のテキスト形式の表現を中心としたオンデマンド型で授業を行った。その後、学生も遠隔授業に慣れてきたであろうこと、また授業への取り組み状況を通じてICT環境に大きな問題を抱えていないことが明らかになってきたことから、第4回、第5回に②オンデマンド型（音声形式）の授業を実施した。こののち、授業内容に合わせて①のリアルタイム型授業も3回試行した。

2.3 先行研究

2020年2月から3月にかけて急速に拡大した新型コロナウイルス感染に伴い、遠隔授業への移行を余儀なくされた大学が最初に懸念したことの一

つは、学生のICT環境、すなわち大学が用意する遠隔授業を学生が受講できるかどうかということであった。多くの大学で学生のICT環境に関する調査が行われ、その結果のいくつかは各大学のウェブサイトでも確認できた。

他方、大学の授業が全面的に遠隔授業で行われることで学生にどのような効果や影響が出るかという点も重要な課題である。遠隔授業が始まってからの学生の受講のようすや適否を確認する調査で、執筆者が本調査を計画していた2020年6月時点でウェブで確認できたのは、京都ノートルダム女子大学⁴⁾、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（以下、慶應SFC）⁵⁾、麗澤大学⁶⁾があった。

4月15日に遠隔授業を開始した京都ノートルダム女子大学は、学士課程学生1,309名を対象に4月28日から5月3日にアンケート調査を実施し、その結果を5月13日に公表している。回答者は695名であった。これによれば、「自分のペースで学習できる」「自宅で学習できる」といった遠隔授業に対するポジティブな反応があった一方で、先生への質問のしやすさや教材のわかりやすさに難を示す学生が見られた。また、遠隔授業で困っていることとして、「コンピュータの操作に慣れていない」「勉強のペースがつかみにくい」「友達と一緒に学べず孤立感を感じる」を挙げた1年生が多かったのに対し、2年生以上は「課題が多い」がもっとも多く選択されるなど、学年によって回答に違いが見られることが明らかになっている。

慶應SFCの調査は、5月7日から13日に総合政策学部、環境情報学部、政策・メディア研究科に所属する学士課程学生、大学院生を対象に行われ、377名が回答した。よい点として挙がってい

るのは「キャンパスへの移動が無くなった」点である。逆に、困っていることには、友人とのコミュニケーション、通信環境の不安定さ、教員との意思疎通への不安が上位に挙げられていた。

麗澤大学は、6月10日から14日に全学生2,873名を対象にアンケート調査を実施し、1,016人から回答を得ている。この調査では、「Zoomを用いたリアルタイム型授業」「音声や映像配信を用いたオンデマンド型授業」「提示された資料を自ら読んで課題を解く資料提示型授業」の三つの遠隔授業の形式について、それぞれの満足度を4件法で尋ねている。その結果、「満足している」と「まあまあ満足している」を合わせた回答の割合はそれぞれ、76.2%、66.5%、42.4%と、学生の満足度に違いが見られた。

本研究では、京都ノートルダム女子大学および麗澤大学のアンケート調査項目を参照しながらアンケート調査を設計した。また、その分析にあたっては、学年による捉えかたの違い、遠隔授業の手法にも注目した。

3. 調査方法

遠隔授業全般に関する見解、各授業方法に対する意見、授業受講時のICT環境の3点に関するアンケート調査票を設計し、「図書館情報学概論」「図書館情報資源概論」「情報サービス論」のそれぞれの科目でLMSを用いて実施した。調査期間は7月13日から7月28日の2週間を設定した。

「図書館情報学概論」は、受講者51名のうち、48名から回答を得た。回収率は94.1%であった。回答者の内訳は1年生が32名、2年生以上が16名である(表3)。同様に、「図書館情報資源概論」は受講者数が32名、回答者数が32名、回収率は100.0%、「情報サービス論」は受講者数が37名、回答者数が32名、回収率は86.5%であった。なお、両科目はいずれも2年生以上が受講している。

アンケート調査項目は、大問で11問とした。遠隔授業全般に関する見解では、遠隔授業でよかつ

表3 3科目のアンケート調査の対象者数と回答者数

科目名	受講者数	回答者数	回収率
図書館情報学概論	51 (32)*	48 (32)*	94.1%
図書館情報資源概論	32	32	100.0%
情報サービス論	37	32	86.5%

*括弧内は1年生の数で、内数。

たこと、困ったことをそれぞれ選択肢の中から複数回答で尋ねた。

各授業方法に対する意見は、①リアルタイム型、②オンデマンド型(音声形式)、③オンデマンド型(テキスト形式)のそれぞれの特性に合わせて、小問で12問、15問、13問を設定した。なお、①リアルタイム型授業は3回実施したが、いずれにも参加しなかった学生がいたことから、参加した学生にのみ回答を求めた。加えて、①から③の授業形態をよかつた順に並べ替えてもらった。

授業受講時のICT環境に関する設問は三つである。具体的には受講時に利用した機器、通信環境、および通信状況を尋ねた。

4. 調査結果

4.1 遠隔授業全般に関する見解

「1.はじめに」でも説明したとおり、本稿では「図書館情報学概論」の結果を中心に、学生の受講のようす、授業に対する志向、授業の問題点を検討する。

遠隔授業でよかつたこと、困ったことを複数回答で尋ねた。その結果を示したものが図1、図2である。

よかつたこととして、「自宅で学習できる」、「通学の手間や時間を減らすことができる」との回答がそれぞれ87.5%(42人)、85.4%(41人)であった。これらは物理的な制約からの解放を支持する声と考えられる。また、「自分のペースで学習できる」が85.4%(41人)、「何度も復習できる」が77.1%(37人)と、授業方法②や③のオンデマンド型授業の特徴を利点とする回答が上位となった。

図1 遠隔授業のよかったこと

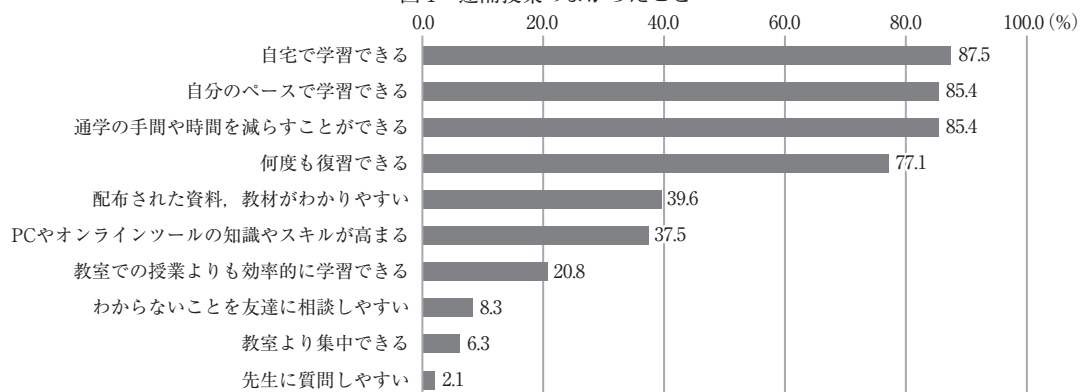
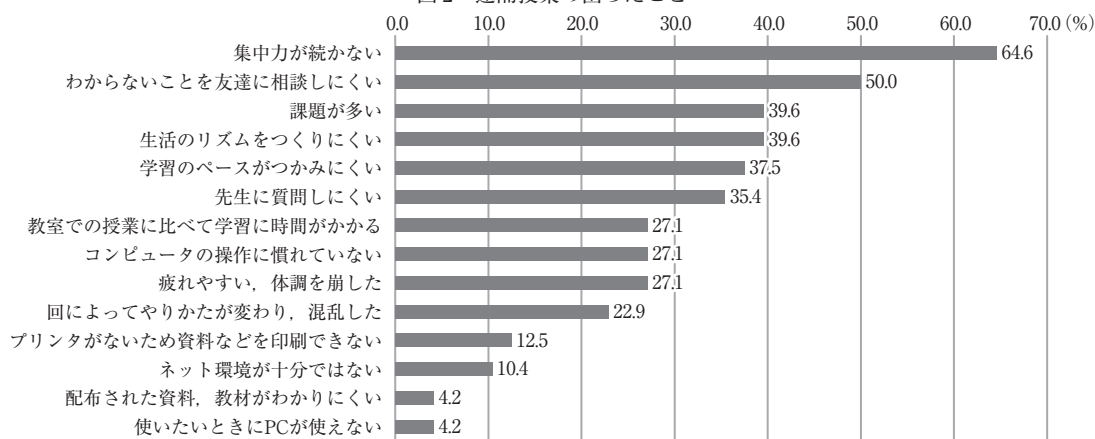


図2 遠隔授業の困ったこと



一方、困ったことでもっとも多かったのが「集中力が続かない」で64.6% (31人)であった。類似の回答として「生活のリズムをつくりにくい」39.6% (19人)、「学習のペースがつかみにくい」37.5% (18人)がある。これらは、自律的な学習が求められる講義形式の遠隔授業に対する特徴的な反応と考えられる。また、「わからないことを友達に相談しにくい」と回答した人の割合が50.0% (24人)であった。教室で行われる集合型授業であれば、一緒に受講する友人に授業中、あるいはその前後に尋ねることで解決したであろう疑問が解決できていないことが推察される。このほか、「課題

が多い」を選択した回答者が39.6% (19人)いた。

4.2 3種類の授業方法に対する意見

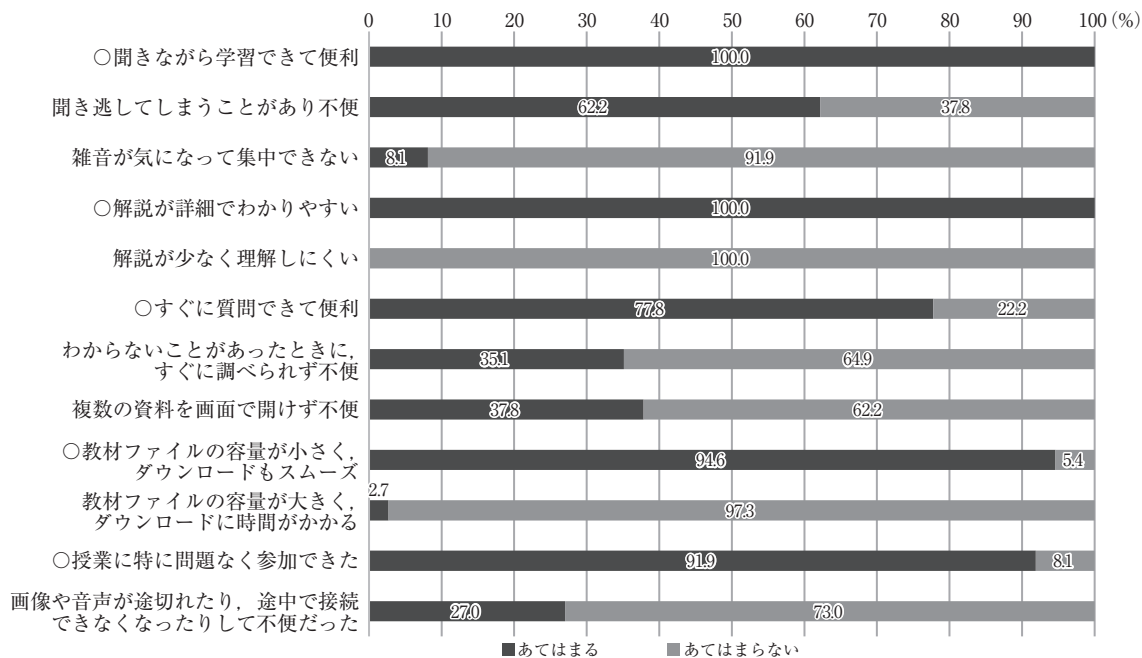
(1) 各授業方法に対する意見

各授業方法に対する意見は、①リアルタイム型、②オンデマンド型 (音声形式)、③オンデマンド型 (テキスト形式) の特性に合わせてそれぞれ12問、15問、13問の小問を設定して尋ねた。また、回答方法はそれぞれの設問に対して、あてはまる、あてはまらないの二択とした。

① リアルタイム型

図3は、授業方法①のリアルタイム型授業に対

図3 リアルタイム型授業に対する意見



する意見の結果を示したものである。○印の付いた設問は、肯定的な内容を、無印は否定的な内容を表している。

肯定的な設問に対しては、あてはまると回答した割合が全体的に高くなっている。リアルタイムの授業ではあったが、「授業に特に問題なく参加できた」受講生も91.9% (34人) に上った。ただし、残りの3人はICT環境に関連して、何らかのトラブルを抱えていたことになる。また、リアルタイム型の授業に参加しなかった受講生11人もまた、何らかの課題を抱えていたかもしれない。

否定的な設問に対してあてはまると回答した割合が高かったのは、「聞き逃してしまうことがあり不便」で62.2% (23人) であった。①リアルタイム型の場合も、授業終了後に音声ファイルを利用できるようにしたが、学習の進行主体が学生か教員かによって異なる結果となった。このことは、「わからないことがあったときに、すぐに調べられず不便」35.1% (13人) でも同様のことが言える。

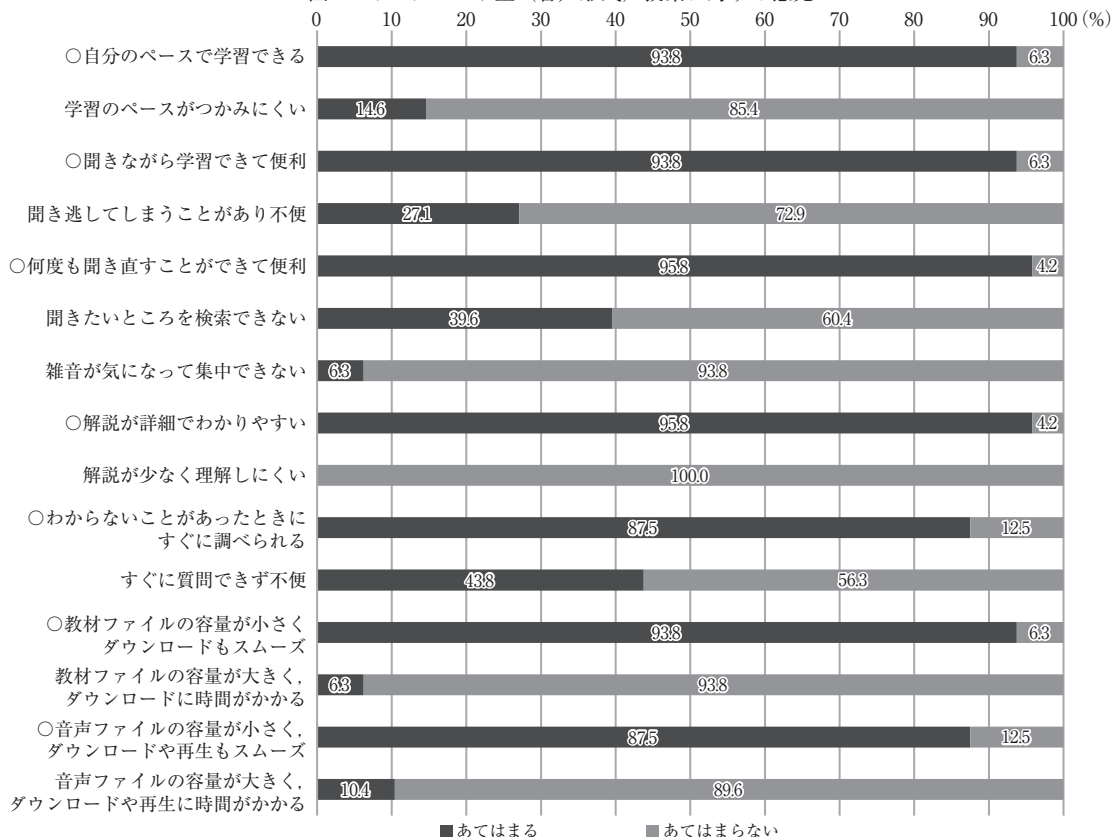
このほか、「複数の資料を画面で開けず不便」37.8% (14人)、「画像や音声途切れたり、途中で接続できなくなったりして不便だった」27.0% (10人) といった、ICT環境に関連することで困っているようすが確認された。

② オンデマンド型 (音声形式)

二つ目のオンデマンド型 (音声形式) の授業に対する意見を図示したのが図4である。オンデマンド型ということもあり、「自分のペースで学習できること」「何度も聞き直すことができて便利」「わからないことがあったときにすぐに調べられる」ことなどが支持されていた。また、①と同様、「聞きながら学習できて便利」である点も、93.8% (45人) と高い割合を示していた。

一方、否定的な側面では、「すぐに質問できず不便」が43.8% (21人)、「聞きたいところを検索できない」が39.6% (19人)、「聞き逃してしまうことがあり不便」が27.1% (13人) とつづいた。(1)の遠隔授業全般では、37.5% (18人) の学生が「学

図4 オンデマンド型（音声形式）授業に対する意見



習のペースがつかみにくい」と回答していたが、ここでは14.6%（7人）であった。

このほか、教材ファイルや音声ファイルの容量に不具合を感じたかどうかは、それぞれ93.8%（45人）、87.5%（42人）が問題ないと回答していた。教材ファイルに比べ、音声ファイルの容量により不具合を感じる受講生が多かったが、全体的に問題は小さく抑えられたようである。

③ オンデマンド型（テキスト形式）

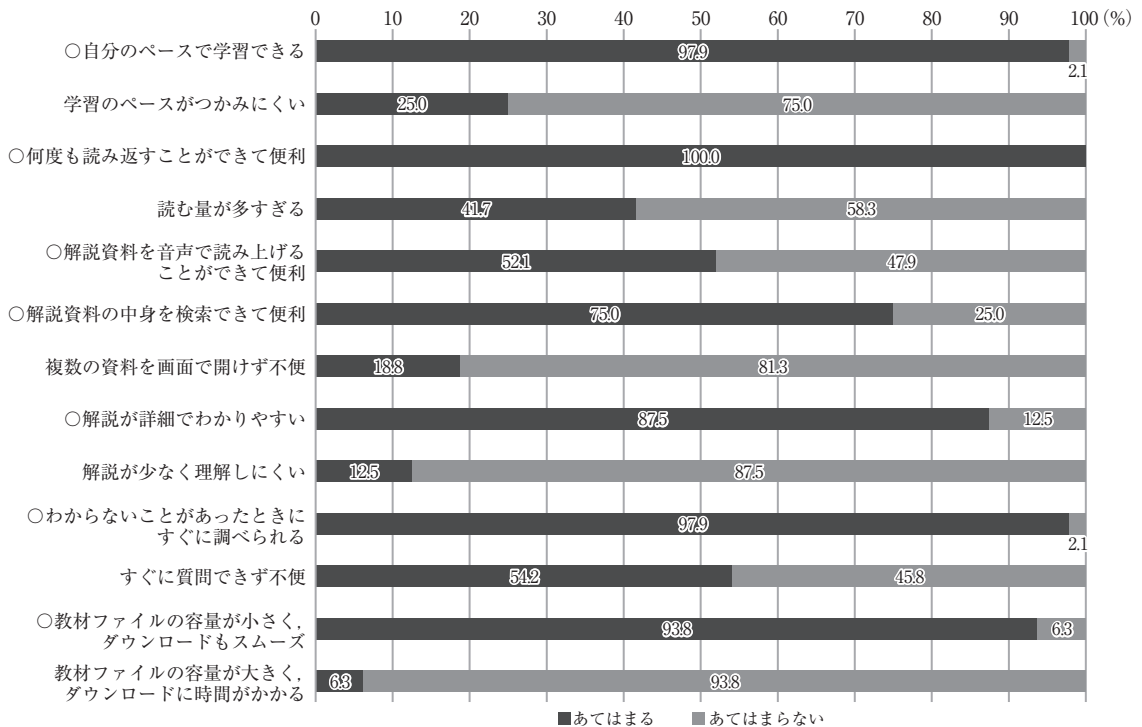
最後に③オンデマンド型（テキスト形式）授業に対する意見である（図5）。

同じオンデマンド型ということもあり、②と同様、肯定的な小問に対して、同意を示す割合が高かった。具体的には、「何度も読み返すことができて便利」100.0%（48人）、「自分のペースで学習で

きる」および「わからないことがあったときにすぐに調べられる」97.9%（47人）となっている。また、解説資料がテキスト形式（PDF）であったこともあり、「解説資料を音声で読み上げることができて便利」や「解説資料の中身を検索できて便利」など、音声による読み上げや内容の検索といった使いかたの利便性について尋ねた。これらの機能をどの程度活用しているかはわからないが、前者は52.1%（25人）、後者は75.0%（36人）があてはまると回答した。

否定的な小問に対する意見であてはまると回答したのは、「すぐに質問できず不便」が54.2%（26人）、「読む量が多すぎる」が41.7%（20人）、「学習のペースがつかみにくい」が25.0%（12人）とつづいた。

図5 オンデマンド型（テキスト形式）授業に対する意見



(2) まとめ

①から③の結果をまとめたものが表4である。

①および②で共通するのは、「聞きながら学習できて便利である」点である。ただし、②のオンデマンド型（音声形式）では「聞き逃してしまうことがあり不便」と回答したのは27.1%であったのに対し、①のリアルタイム型では62.2%であった。

②および③のオンデマンド型授業では、自分のペースで学習できることや、解説資料を繰り返し読んだり聞いたりできること、「わからないことがあったときにすぐに調べられる」ことが支持された。授業の方法や提供される教材メディアの違いによって、学生はそれらに適した学習方法を選択していると考えられる。

また、4.2(1)でも触れたが、講義であれば学習の進行主体は教員であり、学生はそれに合わせて学習することを求められる。その結果、教室での

集合型授業で起こるのであろう課題が調査結果にも表れていた。他方、②や③のようなオンデマンド型では学生が自分のペースで学習を進められるため、その利点を生かして学習しているようすが見受けられた。ただし、図2でも示したとおり、学習のペースがつかみにくかったり、生活のリズムをつくりにくかったりといった点で困難を抱える学生も一定数存在したことも注目しておきたい。

4.3 3種類の授業方法に対する評価

3種類の授業方法それぞれについての意見のほか、三つのいずれが好ましかったのかも順位付けして、評価してもらった。図6は有効回答のあった47人分の結果を、図7は①のリアルタイム型の授業を受けた経験のある学生36人の回答結果をそれぞれ集計したものである。

いずれにおいても、もっとも好ましい方法とし

表4 3種類の授業方法に対する意見のまとめ

	①リアルタイム型		②オンデマンド型 (音声形式)		③オンデマンド型 (テキスト形式)	
	割合	人数	割合	人数	割合	人数
○自分のペースで学習できる	-	-	93.8%	45	97.9%	47
学習のペースがつかみにくい	-	-	14.6%	7	25.0%	12
○聞きながら学習できて便利	100.0%	37	93.8%	45	-	-
聞き逃してしまうことがあり不便	62.2%	23	27.1%	13	-	-
○何度も聞き直すことができて便利	-	-	95.8%	46	-	-
聞きたいところを検索できない	-	-	39.6%	19	-	-
○何度も読み返すことができて便利	-	-	-	-	100.0%	48
読む量が多すぎる	-	-	-	-	41.7%	20
○解説資料を音声で読み上げることができて便利	-	-	-	-	52.1%	25
○解説資料の中身を検索できて便利	-	-	-	-	75.0%	36
雑音が気になって集中できない	8.1%	3	6.3%	3	-	-
複数の資料を画面で開けず不便	37.8%	14	-	-	18.8%	9
○解説が詳細でわかりやすい	100.0%	37	95.8%	46	87.5%	42
解説が少なく理解しにくい	0.0%	0	0.0%	0	12.5%	6
○すぐに質問できて便利	77.8%*	28	-	-	-	-
すぐに質問できず不便	-	-	43.8%	21	54.2%	26
○わからないことがあったときにすぐに調べられる	-	-	87.5%	42	97.9%	47
わからないことがあったときに、すぐに調べられず不便	35.1%	13	-	-	-	-
○授業に特に問題なく参加できた	91.9%	34	-	-	-	-
画像や音声途切れたり、途中で接続できなくなったりして不便だった	27.0%	10	-	-	-	-
○教材ファイルの容量が小さく、ダウンロードもスムーズ	94.6%	35	93.8%	45	93.8%	45
教材ファイルの容量が大きく、ダウンロードに時間がかかる	2.7%	1	6.3%	3	6.3%	3
○音声ファイルの容量が小さく、ダウンロードや再生もスムーズ	-	-	87.5%	42	-	-
音声ファイルの容量が大きく、ダウンロードや再生に時間がかかる	-	-	10.4%	5	-	-

*未回答が1件あったため、回答者数を36人として算出した。

図6 3種類の授業方法に対する評価（全体）

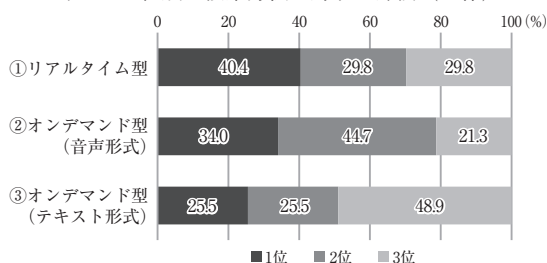
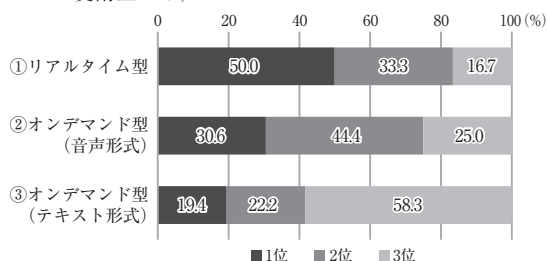


図7 3種類の授業方法に対する評価（リアルタイム型受講生のみ）



て選ばれたのは、①リアルタイム型授業であった。ただし、2位までを含むと、全体では②のオンデマンド型（音声形式）の占める割合が高くなった（図6）。他方、図7で示したように、すべての授業方法を経験した学生のなかでもっとも評価が高かったのは①リアルタイム型であり、1位と2位を合わせても同様であった。

4.4 自由記述に見る遠隔授業への見解

4.1に関連して、遠隔授業で楽しめていること、遠隔授業について不安に感じていることを自由記述で回答してもらった。前者に回答した人は17人、後者に回答した人は25人であった。

遠隔授業で楽しめていることとして挙げられたものに、時間の使いかたがある。通学時間を学習や睡眠、自由時間に充てられる、好きな時間に学ぶことができるといった意見がこれに該当する。また、空間、あるいは他者の視線からの解放を指摘する意見もあった。急に気分がすぐれなくなったときに体勢を楽にできる、服装や髪形、化粧などの準備が不要である、授業中にスマートフォンで気兼ねなく調べることができるといったものである。さらに、二つを兼ねた意見として、「一番集中力が発揮できる時間帯と場所で行う事ができる為、実際の授業よりも頭に残る事が多かった」と述べる学生もいた。このほか、「親と一緒に授業を受けて討論ができる」という興味深い意見も寄せられた。

不安に感じていることのなかで、もっとも多く寄せられたのは授業の内容をきちんと理解できているのかどうかという点であった。自分の提出した課題が合格点に達しているのかどうかに不安を覚えているようである。執筆者は一つひとつの課題についてすべての受講生にコメントを返せなかったが、次の授業の冒頭で受講生から提出された課題を用いたふりかえりの時間を設けることでその代替としていた。しかし、それでは十分とは言えなかったようである。

課題評価への不安に繋がる要因の一つに、他の受講生のようにすがわからないという意見もあった。教室で行われる授業であれば、教員との質疑応答であったり、同じ授業を受けている他の学生のように身を近に感じたりすることで、他の学生の理解度などを把握できるが、遠隔授業ではそれが無いと感じているようである。「周りの人の状況がわからず、自分だけ置いていかれていないか不安」という声がその代表例である。

課題の多さに言及する学生も複数見られた。課題に追われ本当に学びたいことが学べない、あるいは学べているかがわからないという声もあった。同時に、課題の提示方法や提出時期が科目によって異なるため、課題を見逃したり、提出に間に合わなくなったりするかもしれないということに不安を抱えた学生も見受けられた。そのため、一つひとつの科目に集中を要するといった記述もあった。

このほか、質問しづらいこと、ネットワーク接続の不具合、体調の悪化を挙げる意見が寄せられた。

4.5 学年による遠隔授業の見解の相違

最後に、4.1で分析した遠隔授業でよかったこと、困ったことを1年生と2年生以上の2グループにわけて集計した。図8は、遠隔授業のよかったことを1年生の降順で提示したものである。その結果、1年生は「自分のペースで学習できる」「通学の手間や時間を減らすことができる」「自宅で学習できる」を支持する声をもっとも大きかった。次いで「何度も復習できる」であった。一方、2年生以上でもっとも多く寄せられたのは、「自宅で学習できる」であった。これに「自分のペースで学習できる」「通学の手間や時間を減らすことができる」がつづき、「何度も復習できる」の順となった。よかったことに関する回答は、全体として1年生が肯定的に捉えていた。

困ったことも同様に、1年生の回答結果を降順で図示した（図9）。「集中力が続かない」が両者

図8 遠隔授業のよかったこと（学年別）

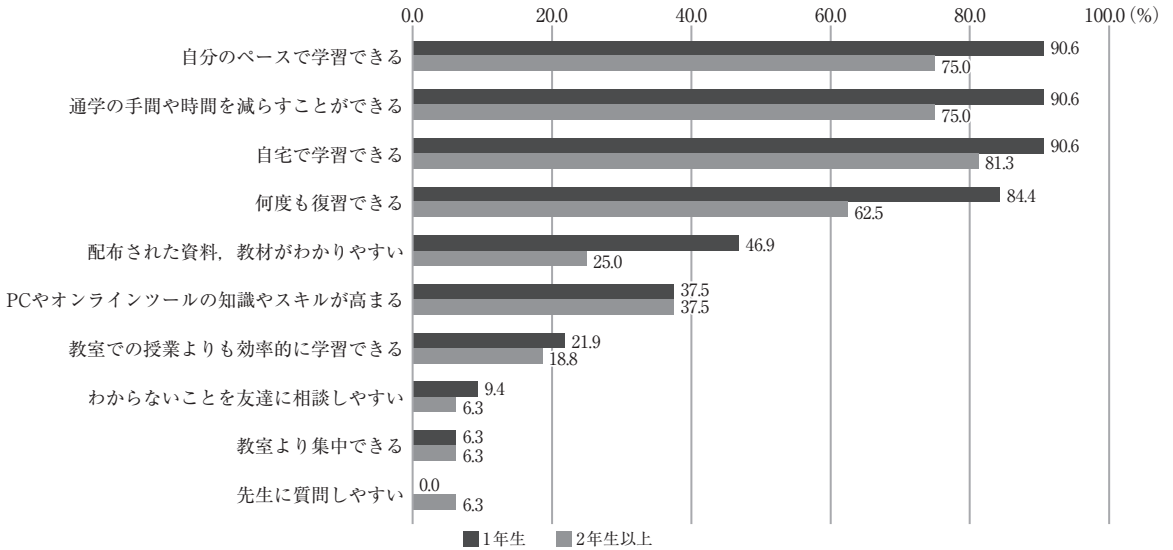
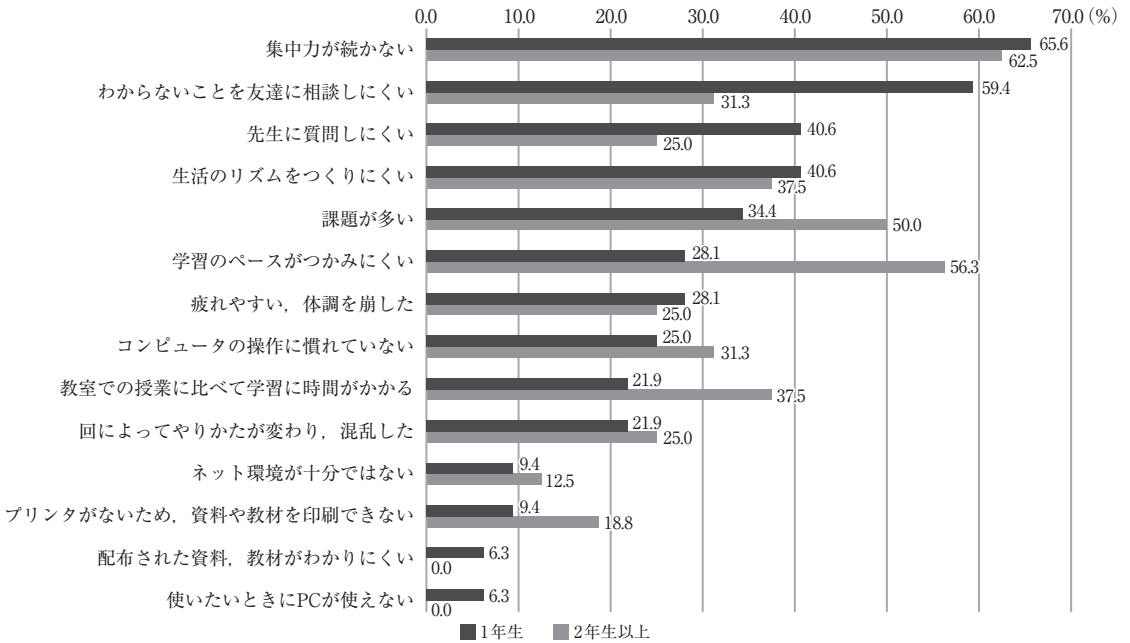


図9 遠隔授業の困ったこと（学年別）



でその割合がもっとも高かったが、それ以降の選択は異なっている。1年生は、「わからないことを友達に相談しにくい」が59.4% (32人中19人) と半数を超え、これに続き「先生に質問しにくい」「生活のリズムをつくりにくい」となった。2年生以上のグループは「学習のペースがつかみにくい」「課題が多い」の二つで半数を超え、「生活のリズムをつくりにくい」「教室での授業に比べて学習に時間がかかる」がこれらにつづいた。両者の選択の傾向には差異が見受けられた。

なお、よかったこと、困ったこと、それぞれの項目に関して、カイ二乗検定を用いて検定を行ったが、1年生と2年生以上との回答の間に偏りは見られなかった。

4.6 「図書館情報資源概論」「情報サービス論」との比較

「図書館情報学概論」を対象にしたアンケート調査結果の分析から得られた知見が他の科目にもあ

てはまるかどうかを確認するため、「図書館情報資源概論」「情報サービス論」の結果と比較した。なお、両科目の受講生はいずれも2年生以上であるため、「図書館情報学概論」の2年生以上の回答と比較することとした。

(1) 遠隔授業全般に関する見解

図10および図11は、遠隔授業でよかったこと、困ったことに関する回答結果をまとめたものである。いずれも「図書館情報学概論」の回答結果の降順に並べている。

よかったことを見ると、「図書館情報学概論」では、「自宅で学習できる」がもっとも多く、次いで「自分のペースで学習できる」「通学の手間や時間を減らすことができる」の順であった。「図書館情報資源概論」では「自分のペースで学習できる」がもっとも支持を集め、「通学の手間や時間を減らすことができる」、「自宅で学習できる」がつづいた。「情報サービス論」でもっとも多かったのは「自宅で学習できる」で9割以上となった。次いで

図10 遠隔授業のよかったこと (科目別)

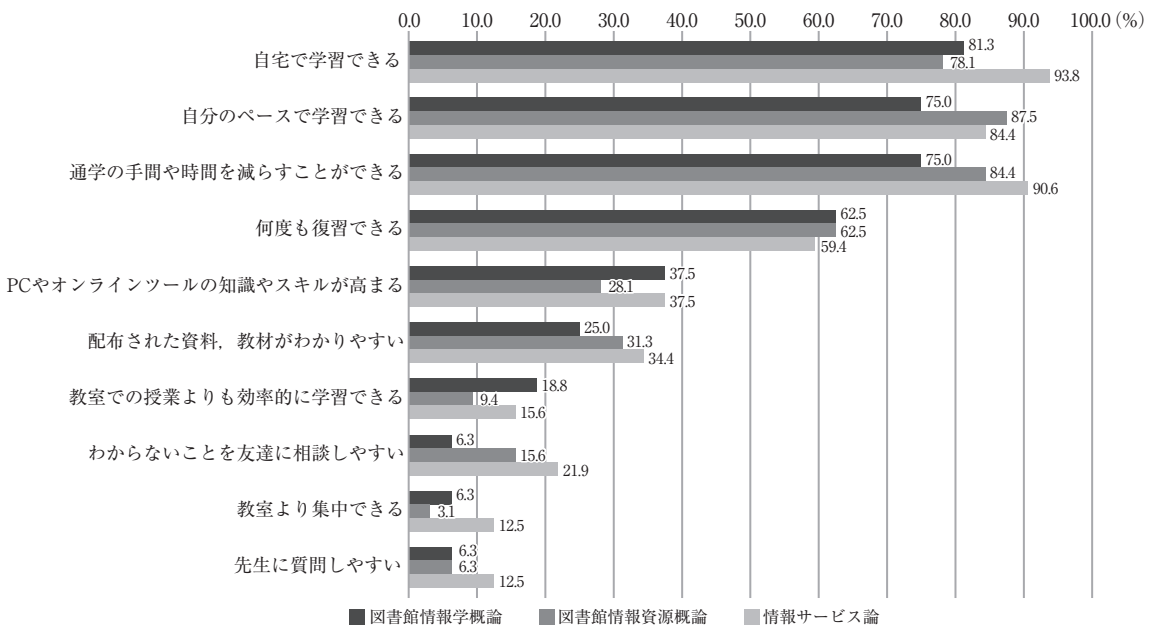
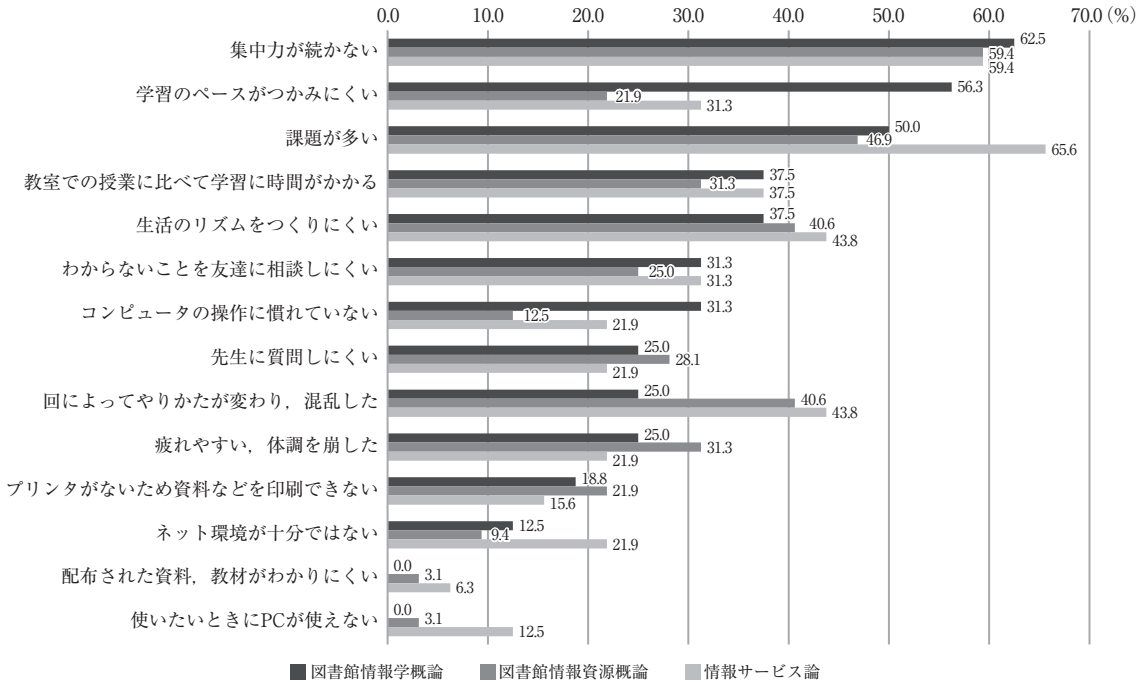


図 11 遠隔授業の困ったこと (科目別)



「通学の手間や時間を減らすことができる」、「自分のペースで学習できる」となった。遠隔授業でよかったことは、順位の差こそあれ、いずれもほぼ変わらない結果となった。

一方、困ったことでは、その傾向が少し異なる。「図書館情報学概論」でもっとも多かったのは、「集中力が続かない」であったが、これは「図書館情報資源概論」でも同様であった。しかし、「情報サービス論」では「課題が多い」がもっとも高い割合を示した。「図書館情報学概論」で次に多く寄せられたのは「学習のペースがつかみにくい」であったが、他の2科目では高いとは言えない。逆に、「回によってやりかたが変わり、混乱した」が2科目で比較的大きな支持を集めていた。遠隔授業で困ったことに関しては、科目間での相違が推察される。

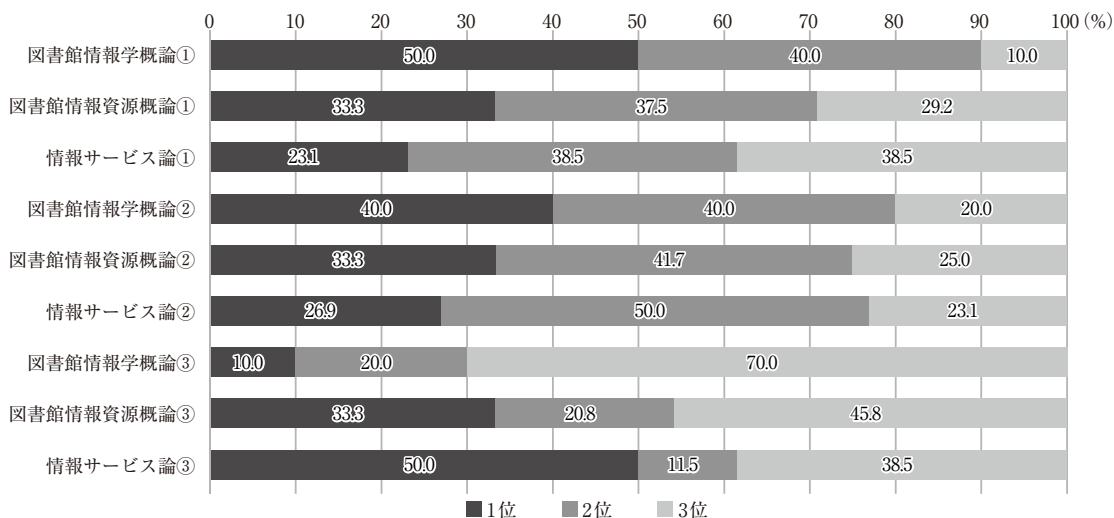
(2) 3種類の授業方法に対する評価

各科目における3種類の授業方法に対する好感

度を比較した(図12)。ここでは、すべての授業方法を体験した学生のみを検討の対象にしている。

その結果、「図書館情報学概論」での授業方法の好感度は①リアルタイム型、②オンデマンド型(音声形式)、③オンデマンド(テキスト形式)であったのに対し、「図書館情報資源概論」では、すべての方法が同率1位となった。2位までを含めると、②オンデマンド型(音声形式)、①リアルタイム型、③オンデマンド(テキスト形式)の順となった。「情報サービス論」を見ると、もっとも人気の高かったのは③オンデマンド(テキスト形式)で、次いで②オンデマンド型(音声形式)、①リアルタイム型となった。2位までで比較すると、②オンデマンド型(音声形式)がもっとも多く、①リアルタイム型と③オンデマンド(テキスト形式)は同率であった。

図 12 3種類の授業方法に対する評価（科目別）



5. ま と め

学生にとっても教員にとっても、すべての科目が遠隔授業で行われたのは初めてのことである。この貴重な経験を記録し、ふりかえるため、執筆者が担当する三つの講義科目でアンケート調査を実施した。その結果、遠隔授業の利便性を多くの学生が実感している一方で、「集中力が続かない」「生活のリズムをつくりにくい」「わからないことを友達に相談しにくい」などの弊害も明らかとなった。

遠隔授業の利便性として支持が高かったのは、「自宅で学習できる」という点である。これには、いくつかの意味が含まれている。たとえば、別の選択肢である「通学の手間や時間を減らすことができる」にも通じ、通学のための時間を学習や睡眠、自由時間に充てたり、好きな時間に学ぶことができたりなど、時間の有効活用を指摘する声に繋がる。自宅で授業を受けられるという利点を生かして、他者の視線を気にすることなく、思い思いの恰好や姿勢で授業を受けたり、活動したりといったことに言及する意見とも関連する。また、本調査では直接触れていないが、新型コロナウイ

ルスへの感染リスクを減らすための方策として歓迎する向きもあるだろう。

「自分のペースで学習できる」ことを選択する学生も多かった。これは、オンデマンド型の授業ならではの特徴である。授業教材を繰り返し読みんだり聞いたりできたり、授業内容でわからないことが出てきたときにすぐに調べられることに利便性を感じたりしているようすが窺えた。

音声による学習教材の提供にも一定の支持が集まった。リアルタイム型に加え、オンデマンド型（音声形式）を好む学生が多く見られたことからこのことを確認できる。すべての教材がテキスト形式の授業よりも、複数のメディアを組み合わせた学習のほうが効率的であったり、利便性が高いと感じたりしたのかもしれない。たとえば、音声や映像を再生速度を変化させて視聴するといった方法をとる学生がいることも見聞する。メディアの特性に合わせて、学生が学習方法を工夫しているようすが推察される。

他方、遠隔授業による弊害も確認された。先に示した「集中力が続かない」や「生活のリズムをつくりにくい」がその代表例である。これらは、

教室という学習空間への移動であったり、他者とそれを共有したり、さらに時間割という半ば強制された学習環境に置かれたりすることで、これまでは問題として大きく顕在化されなかったものと考えられる。しかし、すべての科目が遠隔授業に移行し、自立的に学習することを余儀なくされた結果がこの二つの選択肢に表れたとも言える。また、集中力に関しては、ICT環境の影響も無視できない。加えて、課題の多さにその要因を見出すこともできるだろう。結果、「疲れやすい、体調を崩した」と回答した学生が4分の1に上ったのは十分に留意すべきことである。全国大学生活協同組合連合会が2020年7月に実施した大学生調査でも、同様のことが指摘されている⁷⁾。

上述したことが科目によって異なるかどうかも確認した。その結果、相違がある可能性は示されたが、その違いはどこから来るのかを明らかにするまでには至らなかった。科目そのものに起因すること、各授業時間で扱った内容とその時々を用いた授業方法の組み合わせ、受講生の特性など、複数の要因が考えられる。また、その複合的な結果であることも予想される。

最後に、大学での授業経験のない1年生と2年生以上との間で相違がある可能性も示唆された。1年生の回答で「わからないことを友達に相談しにくい」が上位にあるのは、その典型例と考えられる。教員がさまざまな手法を用いて質の高い遠隔授業を目指したり、それを学生が享受できるよう、大学がICT環境の準備を支援したりするなど、学生の学びの保障という側面はもちろん重要である。他方、学生一人ひとりが実り多い学生生活を送れるよう支援することも、学びの保障と地続きである。その意味でも、大学生生活の第一歩を歩み始めた1年生に対しては、特に十分な配慮が必要である。

6. おわりに

本稿は、研究対象とした三つの図書館情報学教育科目のうち、主に「図書館情報学概論」を対象

とした調査結果を取り上げた。4.6で他の2科目との比較も試みたが、十分な分析には至らなかった。今後の課題の一つとしたい。

また、本調査結果は講義科目を対象としたアンケート調査事例の一端に過ぎない。アンケート調査を通じて学生の受講のようすや授業に対する志向を把握するとともに、授業教材へのアクセスログを活用するなど、遠隔授業ならではの調査手法を組み合わせることで、より重層的に分析できるであろう。もちろん、こうしたデータの取り扱いには十分な注意が必要である。そのことに留意しつつ、本調査の発展の可能性も模索できるであろう。本稿がこれからの大学教育を考えるきっかけの一つになることを期待したい。

引用文献

- 1) “新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況(令和2年6月1日時点)”, 文部科学省, 2020.6.5, https://www.mext.go.jp/content/20200605-mxt_kouhou01-000004520_6.pdf (参照 2020-09-01)。
- 2) “2020年度学年歴の一部変更について(お知らせ)”, 中央大学, 2020.4.1, https://www.chuo-u.ac.jp/uploads/2020/04/9150_student_0401.pdf (参照 2020-09-01)。
- 3) 2020年5月7日に、4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム実行委員会の委員らが情報通信回線の負荷を減らすため、オンライン授業の工夫により、通信量を極力小さくするよう呼びかけ、話題となった。(出典:“データダイエットへの協力をお願い:遠隔授業を主催される先生方へ”, 国立情報学研究所, 2020.5.7, <https://www.nii.ac.jp/event/other/decs/tips.html> (参照 2020-09-01)。
- 4) 京都ノートルダム女子大学教務委員会, “オンライン授業に関するアンケート(学生)結果概要報告”, 京都ノートルダム女子大学, 2020.5.13, https://www.notredame.ac.jp/pdf/cms/2020online_houkoku.pdf (参照 2020-09-01)。
- 5) 植原啓介, “慶應SFCにおける遠隔授業とアンケート調査結果”, 国立情報学研究所, 2020.6.5, https://www.nii.ac.jp/event/upload/20200605-5_Uehara.pdf (参照 2020-09-01)。

- 6) “オンライン授業に関する学生アンケート調査”, 麗澤大学, 2020.6.23, <https://www.reitaku-u.ac.jp/news/images2/2020/06/5c3ea42fa8b2d3f30d2ef7c10b9c253a.pdf> (参照 2020-09-01)。
- 7) 全国大学生生活協同組合連合会広報調査部, “「緊

急! 大学生・院生向けアンケート」大学生結果報告”, 全国大学生生活協同組合連合会, 2020.8.7, https://www.univcoop.or.jp/covid19/recruitment_thr/pdf/link_pdf01.pdf (参照 2020-09-01)。